【ねがいましては】

平成２８年５月２５日　　*KYOWA SCHOOL*
第３０７号

「ひかり」

最近、ある恋愛映画「天使の恋」に出会い、それにハマってしまいました。３５才の大学教師と、１７才の不良女子高校生とのストーリーなのです。簡単にあらすじを紹介しますと、大学講師は、不治の病で余命が２～３年と宣告されています。そこに１４才当時にレイプされた過去を持つ高校生が現れます。彼女は、その経験から人に対しての信頼を全くなくし、不良化しています。そこへ大学講師との出会いがあり、こころに電気が走るのです。講師は余命のことを思えば真剣になど交際ができるわけもなく、素っ気なく相手にしませんが、彼女の明るさに徐々に心の紐がほどけていきます。それからほんのひとときですが、２人はしあわせな時間を過ごします。そして余命が尽きる頃、つまりラスト近くで男性がその子に言います。「なんでそんなに真っ直ぐなんだ。」その返事が「あなたが私に光りをくれたんでしょ。」

この言葉が妙にこころに残りました。そして時間の経過とともに見えてきました。

そうかどんなに心がすさんでしまっていても、自分にとって大切な人が現れることで、人は変われるものなのだ。

この作品はたしかに恋愛小説の映画化なのですが、人と人の係わり方からすれば、大切な人と大切な人との間の心の葛藤を描いたもの。だとすれば、この関係を子どもと親に置き換えても良いのかなと思います。

つまり、恋愛感情を迎える以前の子どもたちにとっての大切な人、家族です。とくにお母さんの存在は大きいと思います。

先ほどの少女は、好きな男性が現れたことで、自分で自分を変化させていきます。信頼を１００％にするために、自ら今までの行動を変化させていきます。ここで大切なことは、自分の「素」を出しているところだと思いました。相手の反応を伺いながら、こうしたら嫌われるかとか、こうしたら好かれるとか言うような「お伺い」がないことです。自分の持っている「素」を最大限演出しています。男性は今までにない幸福感を覚え始め、笑顔を取り戻します。そしてある願いが生まれます。「もう少し生きていたい。」・・・つまり生きようとする力が生まれます。

この関係を「子と親」の関係に重ねると、何と理想の家族が生まれるのです。

子と親は１００％信頼で繋がっています。子は親に「素」で接します。そんな我が子を見て、親は感謝の念が生じ、自然と親も我が子に「笑顔」で返します。

ストーリーなので、「現実はそんな甘くはないわよ。」と言われれば、それでおしまいなのですが、子は常に夢を抱きながら生活していると思います。日々学校であった現実を家庭へ持って帰ってきます。それをしっかりと聞いてあげるのは家族の役目。それに対して信頼感１００％の対処をしてあげるのも親の役目だと思います。

娘さんが男性に対し理想としているのは「お父さん」

息子さんが女性に対して理想としているのは「お母さん」

「わたし、お父さんみたいな人と結婚したいな。」なんて言われたいですよね。

さて、ここからが本題です。

勉強が嫌いでやりたくないからやらない。テストではいつも無残な結果を持って帰ってくる。当然親としては気にならないはずがありません。この場合、ある二つのケースが考えられます。本当に勉強が嫌いなのでやらない。もうひとつが、点数が思わしくないことは重々承知の上で、やはり芳しくない。前者は家族間の信頼度に問題ありです。しっかりと親子間の絆作成に勤しむ必要がありそうです。男の子は結構多いようです。「かあちゃんうるさい！・・・」

後者です。悪いことはわかっていても、自分なりに努力はしようとしても、結果がついてこない。ご両親に対して申し訳ない気持ちでいっぱいになります。精神的にも常に追い詰められた状態になります。いつも「どうしよう」ばかりです。

PTSD（心的外傷後ストレス障害）、過去に強い刺激があったことで、それが心に残ったままで、何かのきっかけでそのときの気持ちが現れてしまう。そんな経験を持ったお子さんに多く見られがちだと感じています。学校であったり、家庭であったり・・・小さな PTSD です。世間で一般的に言われるのが、事故の瞬間を見てしまったとか、大きな災害に出会ってしまったとか、新聞に載るような事件で扱われることが多いのですが、私が取り上げたいのは、普段、本当にまじめに生活していながら、学校からの「評価」が原因で、小さなトラウマが心に残り続けてしまった子どもたちです。因子は様々です。突然今までになかった点が出て、それを親から叱責された。語彙の勘違いで、まったくテストができなかった。例えば、「異なる」の意味を「同じ」と解釈してしまったり。実際にいます。何が原因でこのような点に結びついたのか、一番わかっていないのが本人です。

「勉強ができない」という症状は、いずれにしても「評価」があることで発生します。だれひとり「勉強ができない人になりたい」とは思っていません。そのような状態に陥ってしまった子たちは、毎日が PTSD 発症なのです。

教育とはその状態を取り去ってあげるものなのではないでしょうか。学校とは子どもたちを、先ほどの女子高生が「素」を取り戻したように、「ひかり」を受ける場ではないでしょうか。生きようとする子。笑顔が絶えない子。

「ひかり」を奪ってしまっているのは・・・。